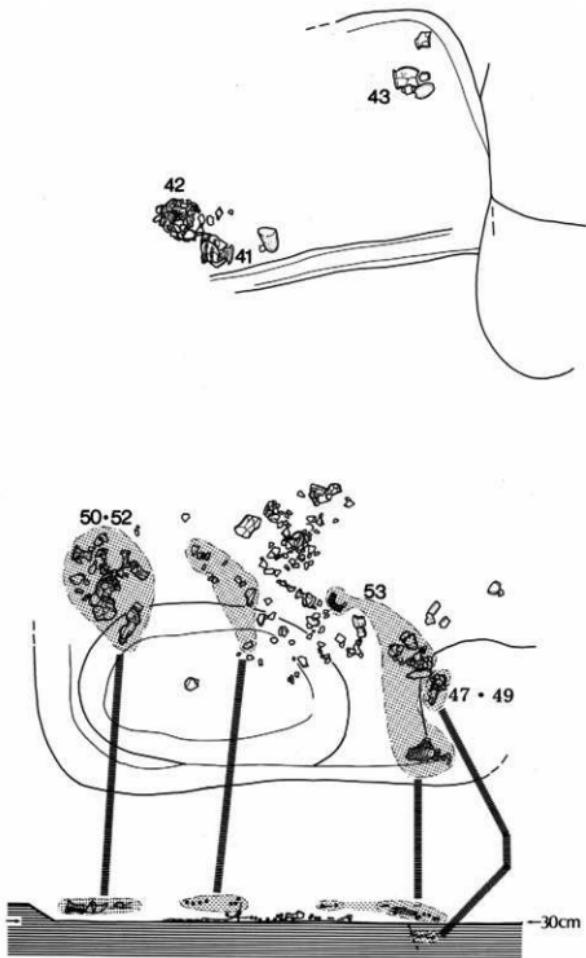
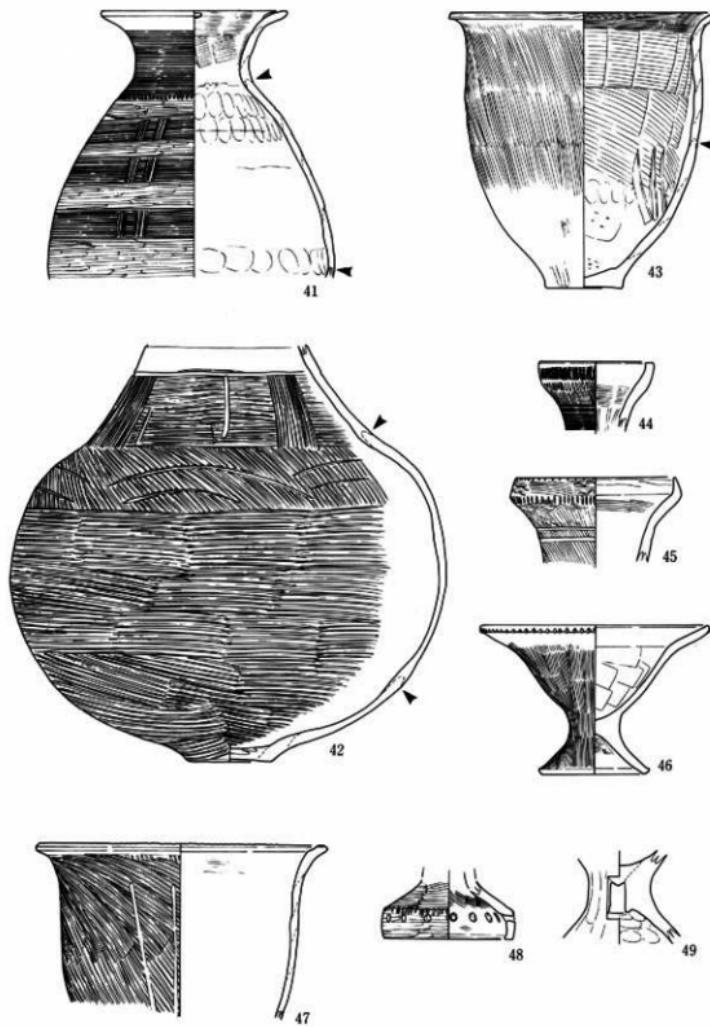


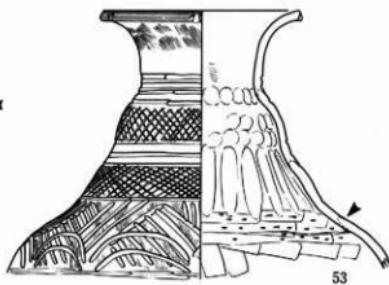
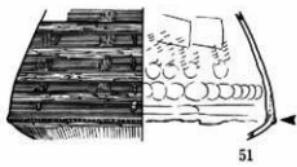
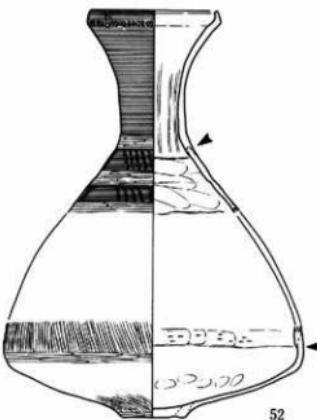
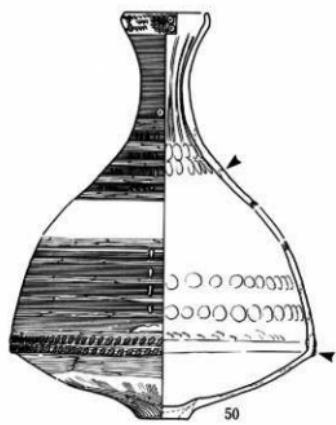
- S B 29** 出出土器は大きく下層・上層の2群および土坑内部出土の一群に分かれる。
- 下層は住居北東部の床面直上につぶれた状態で41・42が近接して、43が少し離れて出土した。
- 上層は住居南西部において床面から10cmほど浮いて出土した。上層は破片の移動などによるばらつきが著しく、また風化も認められる。
- 下層**
- 41は太頸壺A (櫛描紋a類: 複帯3段: 櫛II種b類)。縦位直線は(2・2・2)×2の櫛III種。口縁部内面に円形浮紋。黄褐色。
  - 42は太頸壺B。頭部境界上部の紋様は、櫛描直線紋(櫛II種b類)の後、縦に沈線と櫛描直線を交互に施す。その上部は付加沈線とナデによる無紋帶。底部成形a。体部3分の1下半に成形第1段階の接合面を示すふくらみがあり、第2段階の接合面は頸部境界にある。黒色仕上げ。
  - 43は壺A。口唇部はハケメ調整で面をつくる。
  - 44は一応細頸壺Aaのバリエントとしてとらえ得る。口縁部の連続櫛刺突(→方向)は二枚貝刺突紋あるいは繩紋との施紋上の共通手法か。45は太頸壺Baの模倣か。口縁部上下端に刻み、口縁部・頸部に平行波状紋と直線紋。
  - 46は粗製の高杯A。
- 土坑**
- 47は壺Aa 2。口唇部上端の刻みは二枚貝で←方向。体部外面は二枚貝調整の上に下部から伸びた研磨がまばらに及んでいる。48は細頸壺 Aa 口縁部を倒立して脚部とした精製の高杯脚部。外面研磨。黒色仕上げ。49は台付鉢。中央部を円筒状にいったん抜いた後、上部から塞いでいる。
- 上層**
- 50・51は細頸壺 Aa (櫛描紋c類)。50は、口縁部円周4分割の位置に圧痕を施した円形浮紋2段。波状紋を複帯に施し、刻みはない。縦位弧線は(2・2)×4を浮紋列間に2単位。体部横円形浮紋にハケメ工具の圧痕。底部外面研磨、成形a。灰色。51は口縁部円周6分割程度の位置にハケメ工具の圧痕をもつ横円形浮紋。内面に爪圧痕多数。52は細頸壺 Aa。櫛描紋b類単体で多段化傾向が認められる。赤彩痕あり。縦位弧線は3×4。口縁部棒状浮紋は円周4分割の位置にあり、ハケメ工具の圧痕をもつ。屈曲部には→方向にD字圧痕。底部成形a。底部外面は研磨だが、凹凸がある。
  - 53は太頸壺B・Cの折衷。施紋は沈線紋が最初。斜格子紋は右下がり→左下がりの順。複合鋸歯紋は→方向へ。口唇部の櫛描紋、指頭圧痕、体部上部の連弧紋は太頸壺Bに、頸部無紋、体部上部の複合鋸歯紋は太頸壺Cに、迫ることができる。しかし、紋様部の一次調整や連弧紋直下に部分的に確認できた研磨はそれらと異なる系統(A系統か?)の手法か。
  - 56は無頸壺。上段の櫛描紋帯は波状紋。以下は直線紋に縦位弧線の一般的な組み合わせ。
  - 57は壺Aa 2。58は壺Dだが、体部上半への直線紋はない。59は壺D。



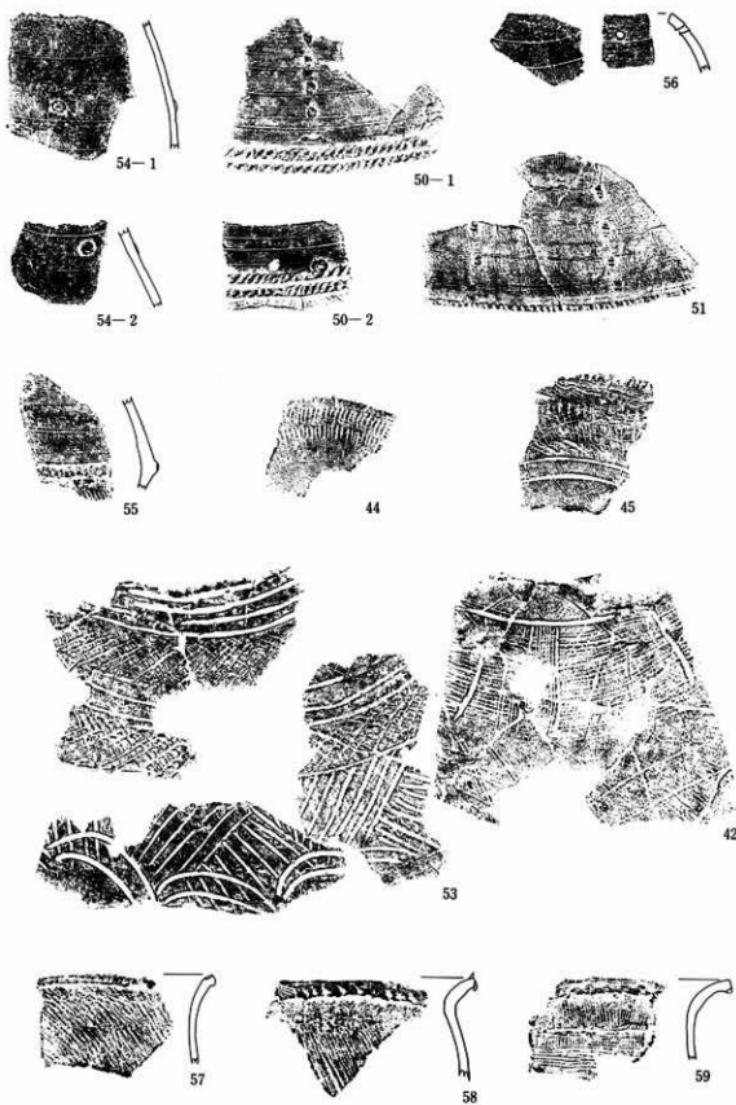
第36図 SB29土器出土状態（1:40）



第37圖 SB29出土土器 (1)



第38図 SB29出土土器 (2)



第39図 SB29出土土器 (3)

S B 30 土器の堆積層は南から北へ順次薄くなっている。南から投棄された状況が読み取れる。しかし、完全になるものはほとんどなく、破片も散在していた。

60は太頸壺A。口縁部内面（円周4分割の位置？）と頸部に管状工具で圧痕を加えた円形浮紋が施される。円形浮紋に圧痕を加えるのは新しい手法。黒色仕上げ。61は細頸壺Aa。櫛描紋はc類。黒色仕上げ。62は無紋系の太頸壺A。63は作りがかなり雑。64は頸部に沈線をめぐらす非櫛描紋系の壺A。口縁部は内外面に丁寧なナデが施され、とくに内面には面がつくられている。口唇部は刻みのために、やや上下に拡張されている。赤褐色。65は細頸壺Aa。櫛描紋は櫛II種a類で断続的に施されており、口縁部近くでは各単位の端が斜めに交差して、B系統壺の体部下半のような仕上げになっている。櫛描紋の手法が稚拙であるというよりは、これで「手法」として独立しているように思う。

66は粗製の高杯。67は台付鉢の脚台か。68は鉢Ac。壺の成形第1段階。

69はやや大形の壺で、外面はハケメ工具による調整であるが、口縁部内面は、二枚貝による角度でC系統に共通する手法を採用している。折衷型である。70はまさしく深鉢Ca。口唇部、体部外面、口縁部内面ともすべて二枚貝による調整・施紋である。口唇部には指頭圧痕が2ヶ一対で何箇所か施される。圧痕は下方に引かれている。

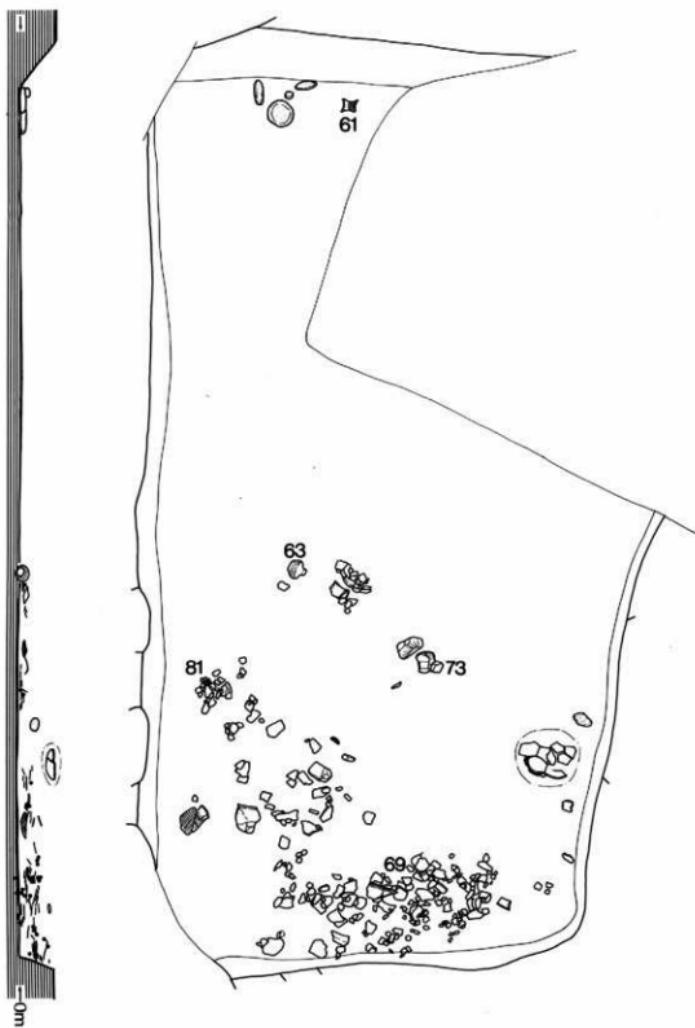
71は壺D。体部は非常に粗いハケメで1cmあたり2~3本。頸部にハケメ工具のアタリ状の沈線が1条あるが、おそらく体部上半に直線紋が施されているのであろう。72はやや小形の壺。

73は縄文をもつ太頸壺A。74は縄文をもつ細頸壺Aa。内面体部上半の頸部寄りに幅の狭い板状工具による引っ掻いたような静止痕がある。

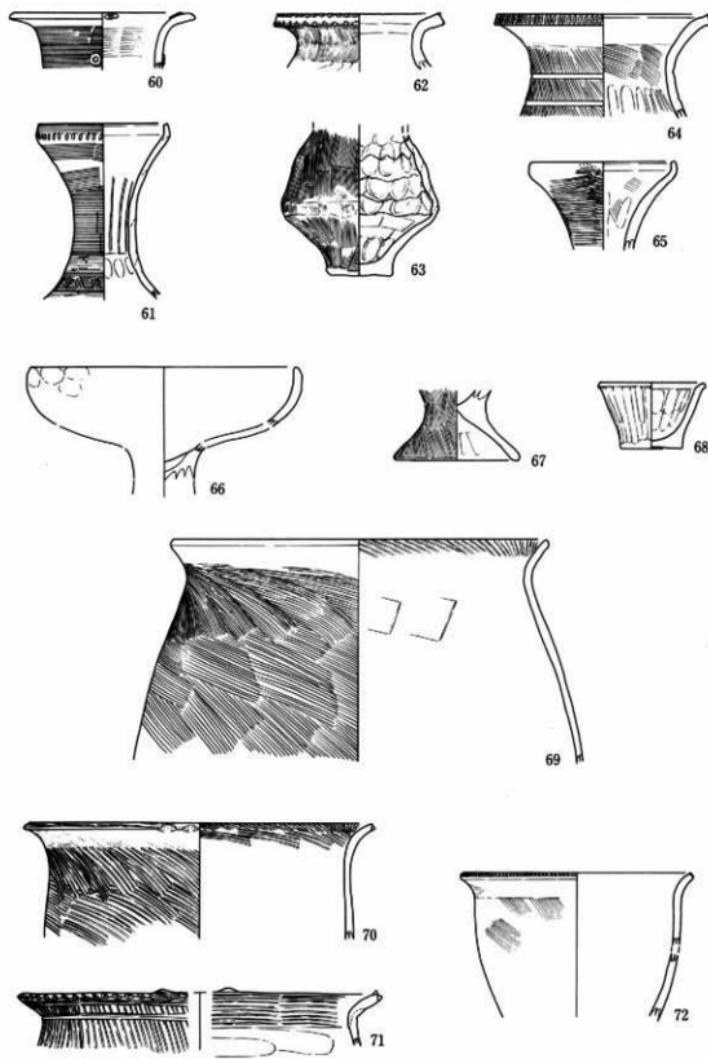
75は口縁部の上下端部に二枚貝刻みを施す壺。外面には櫛描紋。B系統のバリエントか。76はCa系統。受口状口縁の太頸壺で口縁部外面に沈線の羽状文、口唇部に刻みを施す。灰褐色。77は太頸壺で口唇部に縄文。

78は壺Ad、79は深鉢Ca。前者はハケメ、後者は二枚貝だが、調整手法は同じ。80・81は深鉢Cb。口縁部内面の櫛刺突紋はすでに押し引き状ではなくっている。

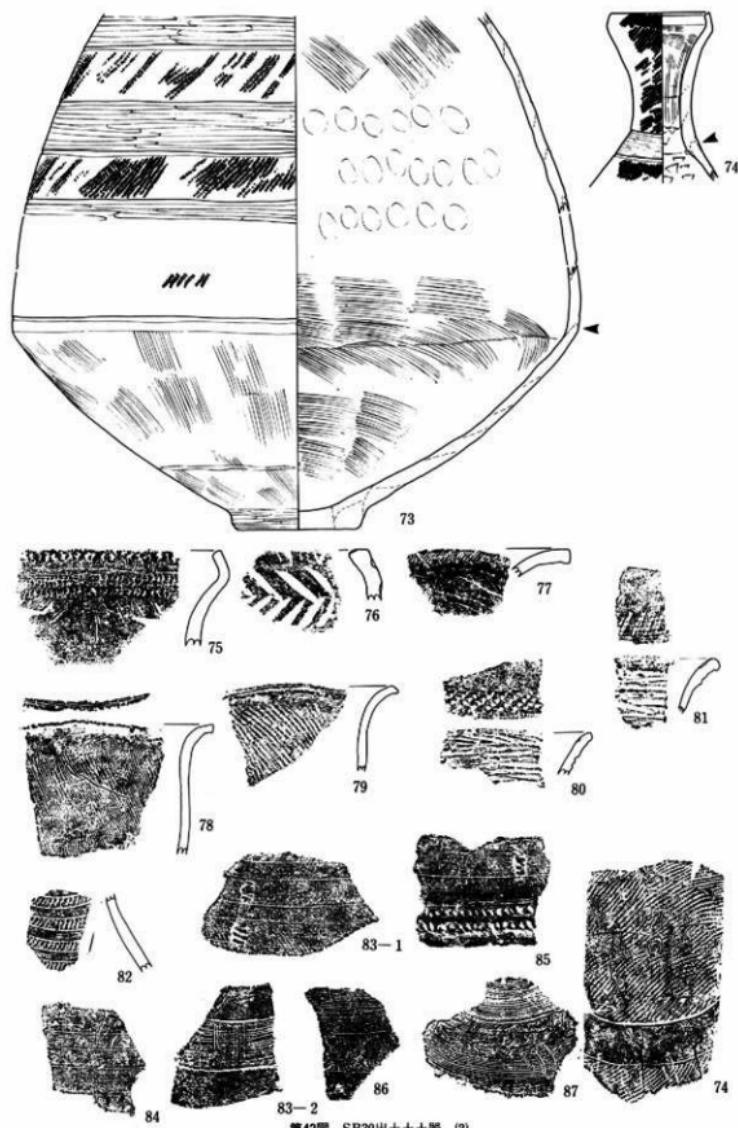
82はCa系統の壺。黒色仕上げ。83は櫛描紋b類。単帶で多重化している。84は櫛描紋c類。85は櫛描紋a類か。86は櫛描紋b類。単帶。87は櫛I種A類。付加沈線は欠落している。継位弧線は3・2・3の櫛III種。



第40図 SB30土器出土状態 (1:40)

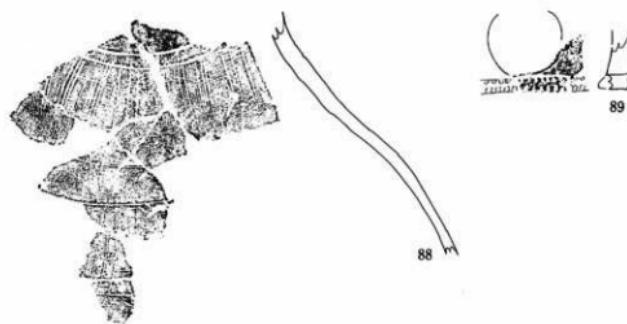


第41図 SB30出土土器 (1)



第42圖 SB30出土土器 (2)

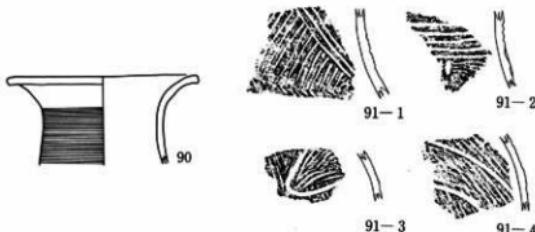
**S B 31** 88は太頸壺B。櫛II種b類による櫛描直線紋のあと、縦位に櫛描直線と沈線が交互に施される。89は円孔のある高杯脚部。外面は1条の沈線によって突帯状の部分が作り出され、その上下にハケメ工具で刻みが施される。



第43図 SB31出土土器

**S B 39** 90は太頸壺A。頸部は比較的円筒状に近く古い形態を残している。

91は太頸壺C。1は頸部下端の複合鋸歯紋。2は頸部上半の隆起部近辺であろう。横3本の沈線を縦2本の沈線というか压痕が切る部分の下に二枚貝背面压痕がある。3はバナナを一つずつ並べたような連環状弧紋の一部。二枚貝調整→二枚貝施紋(弧状)→沈線で囲むという順で施紋される。4は3の右半分。



第44図 SB39出土土器（拓図1：4）

SB41 92は櫛搔紋d類。沈線の弧線が2本ずつ対称しているが、おそらく弧線間に縦位の沈線が複数条施されるのであろう。93は太頸壺B。底部はやや上げ底になっている。体部下半の調整は底部から見るとクモの巣状に施されているが、横から見ると羽状条痕風になっている。94は甕D。口唇部にハケメ工具による大きな圧痕があり、上端は突起状に上に出ている。95は甕Ac。口縁部は外反が緩いだけでなく、厚みも体部に比べて厚く鈍重な感じがする。内面には粗いハケメが施されている。



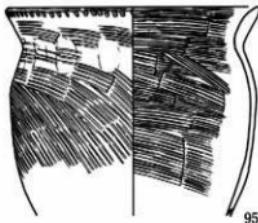
22



93



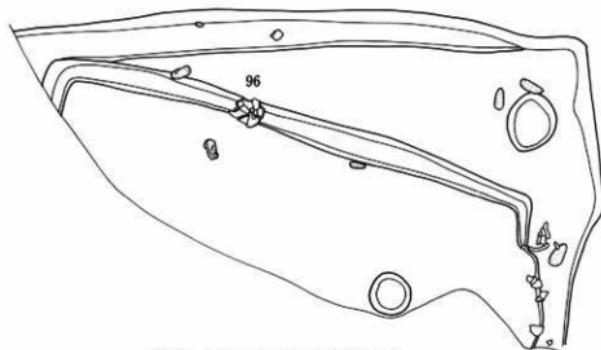
94



95

第45図 SB41出土土器

SB43 土器は床面直上に遺棄されていた。棒状跡も幾つかあったが使用痕跡のあるものはない。96は甕Ad。口縁部はヨコナデされている。97は甕Aa2。口唇部はハケメ調整で面をもつ。上端にはハケメ工具の刻み。



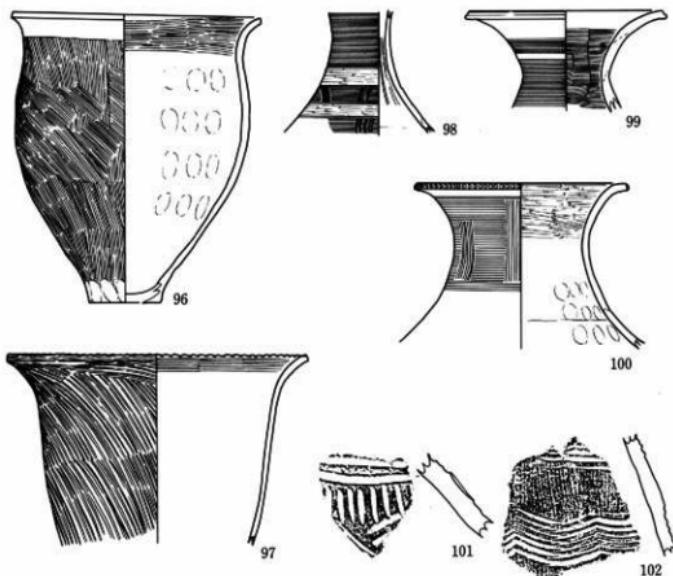
第46図 SB43・44土器出土状態 (1:40)

98は細頸壺 Aa。櫛描紋 b類で、単帶の多重化が進む。99は太頸壺 A。口唇部はヨコナデで凹面をなす。

S B44 101はC系統壺の頸部から体部への移行部。最下部の施紋はおそらく複合鋸曲紋。

102は甌Dの体部上半。

S B45 100は太頸壺 A。頸部は内彎して口縁部にいたる。口縁部は端部近くではほぼ水平に外折して面をつくり、内面を丁寧に研磨する。頸部の櫛描紋は縦位に長短の櫛描紋で分割する。下のほうは櫛描紋がないのではなく判別できないから空白になっている。黒色仕上げ。

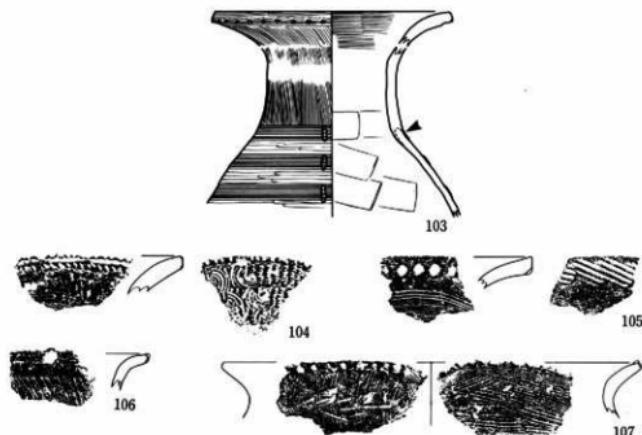


第47図 SB43・44・45出土土器（拓図1：2）

**S B46** 103は太頸壺A。頸部に櫛描紋は無いが、体部櫛描紋は単帶の多重化である。棒状浮紋にはハケメ圧痕が施されている。

104は口縁部内面には櫛描の半円弧(扇形紋)を相対させた部分を分割線としてその間に櫛刺突帯を充填している。大地形壺のバリエントかもしれない。105は太頸壺Aだが、口縁部内面に二枚貝による矢車状紋(深鉢Caの内面紋に共通)を施している。紋様的に折衷型。

106は甕Ad。107は甕D。口唇部にはハケメ工具による小刻みと大きな圧痕が施されている。



第48図 SB46出土土器

**S B47** 108はB系統甕。頸部の細長い形態であると思われる。口唇部には櫛描紋ではなくナデの後に単独圧痕が施される。

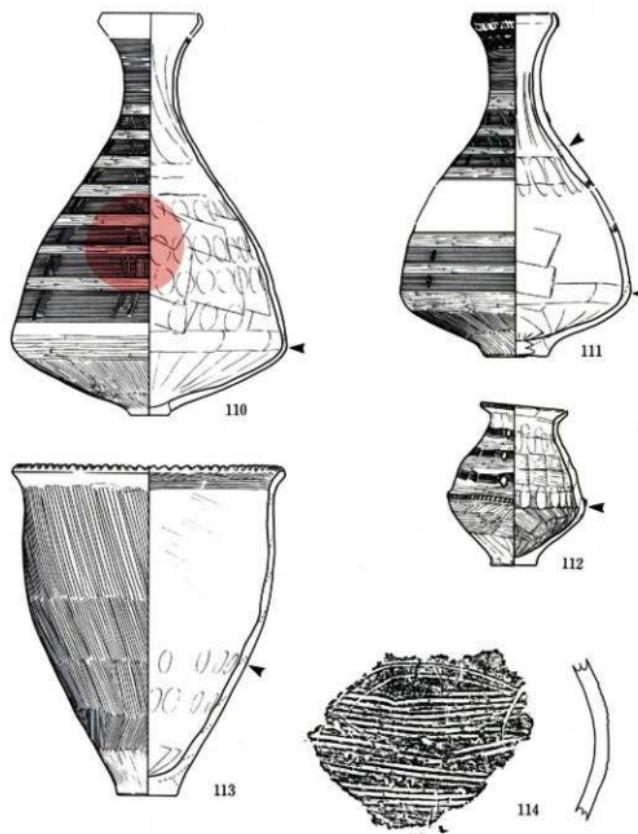
109は甕というよりは鉢に近いかもしれない。頸部に沈線が1条施されており、まるで前期遠賀川系土器のようである。



第49図 SB47出土土器

SB49 110・111は細頸壺 Aa。110は非常に薄いつくりである。櫛描紋 a類。単帯で多重化が進む。縦位弧線は2・2・5(2・3か)の櫛III種。底部は欠損している。111は櫛描紋 c類。頸部上端の櫛描紋は波状紋2帯になっており、波状紋の多重化がうかがえる。縦位弧線は3・3・3の櫛III種。底部成形はaか。

112は小形壺。体部の上半と下半の大きさを違えているのか、鉢 Ac に載せた小形壺といった趣で複合土器のような作りになっている。上下の境界には粘土紐を貼りつけて刻み突帶を作っている。櫛描紋は←方向に断続的に簾状紋風に施している。口唇部には細かい



第50図 SB49出土土器（拓図1：2）

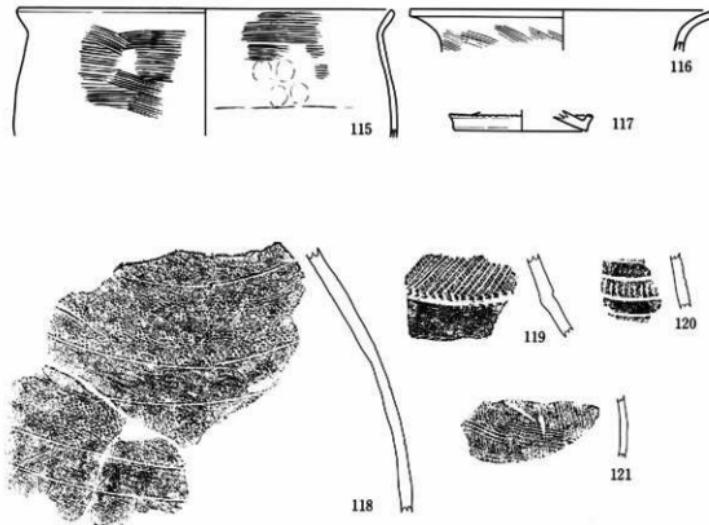
刻みを施す。

113は甕 Ab。口縁部の立ち上がりは強く、口唇部上端へのハケメ工具の刻みも深い。底部成形はc 2。114は二枚貝調整を施しC系統壺の体部上半であるが、B系統壺紋様と同じ連弧紋が施されている。

S B52 115・116は甕 Ad。

117は高杯の脚台。端部は上方にはね上げて刻みを施している。精製である。

118は疑似繩紋。原体は二枚貝である。中期初頭以来の通有の原体である。119はB系統壺。斜格子紋直下の沈線上には二枚貝刺突が施されている。120は二枚貝刺突紋系壺。121は甕W。振幅の小さい波状紋が施されている。



第51図 SB52出土土器

S B54

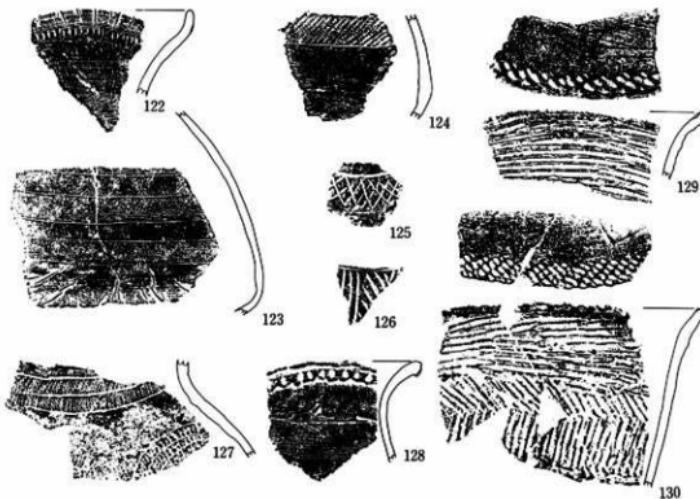
122は細頸臺 Aa。123は櫛描紋 b類。単帯の多重化が進む。

124は縄紋。126は複合鋸齒紋。

127は二枚貝刺突紋系臺。体部には二重連弧紋が施されるが、刺突紋帶間に研磨部分を挟まない代わりに沈線が1条加えられている。新しい様相というよりは、手法的なバリエントであろう。黒色仕上げ。

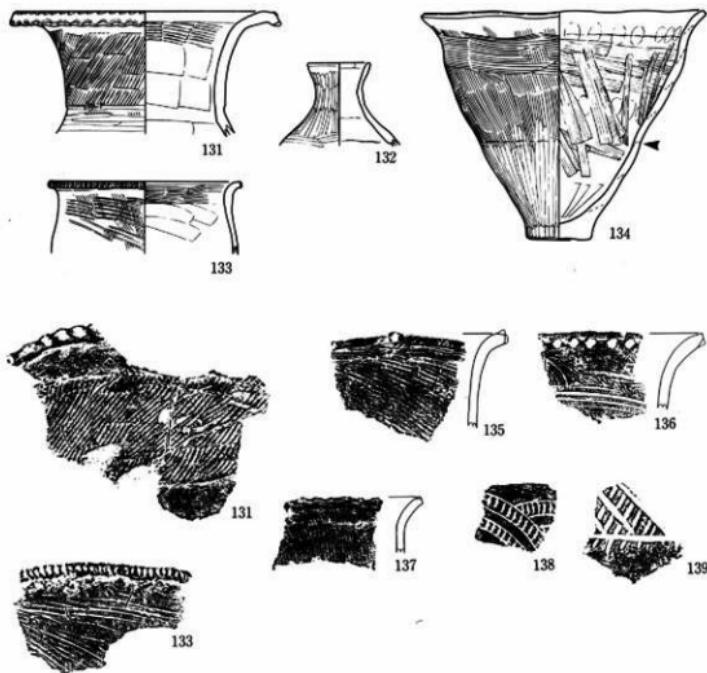
128は甕D。口縁部の刻みは刺突紋帶状で口縁部の外反も緩い。40と類似している。ひとつの型として区分できるかもしれない。

129・130は深鉢Cb。両者とも口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状になっており、古い様相を見せる。



第52図 SB54出土土器

- S B55 131は太頸壺A。頸部無紋系である。体部紋様は不明。頸体部の境界には研磨のために段が形成されている。132は小形壺。外面研磨で無紋。
- 133は甕Ac。口縁部が短く外反する。134は煮沸痕跡がなく、鉢Aに区分する。体部外面上半にはヨコハケメが施されており、甕Dに共通する。底部はやや上げ底。
- 135は甕Aa 1。136は甕 Ac。しかし137は甕Ab。135は混入か。
- 138は二枚貝刺突紋系壺。黒色仕上げ。



第53図 SB55出土土器

S B56 土器は床面上に遺棄の一群と投棄された状態の破片多数がある。しかし、時期差は認められないでの一括して説明する。

140は0期の土器。出土状況は床面から浮いて、実測図の天地を逆にし口縁部を下にして出土した。もともとこの時期に属す土器ではないが、頸部の切断（折損か）後に破面が擦られて整えられていること、二次加熱を強く受け赤化変色していたことから考えると、再利用されていた（使用法は炉での底の底部固定用であろうか）ようである。

141は太頸壺A。口縁部は強くヨコナデされ内面には平坦面が作られる。142は無頸壺。櫛描紋系の無頸壺とは形態が異なる。

143～146は細頸壺Aa。114は櫛描紋b類。単帯の多重化が進む。縦位弧線は(3・2)×2の櫛III種。内面には爪圧痕多数。145は櫛描紋c類。縦位弧線は複数3・3の櫛III種。浮紋は指で押された円形浮紋とハケメ工具で圧痕を加えて棒状に近い橢円形浮紋が交互に丁寧に施される。体部最大径の刻み突帯2条は、上は小刻みで丁寧であるが、下は粗く雑である。

146はハケメのみの粗  
製壺である。床面上に  
遺棄されていた。

148～150は甕Ad。149  
は口唇部の刻みが上下端  
にある。150は口縁部と体  
部下半を欠損して床面直  
上で正立して出土した。器  
台のような役割であった  
かもしれない。151・152  
は甕Ac。

153・154は甕Aa2。  
153は口唇部にハケメが  
ある。154は口縁部外間に  
ヨコハケメが施され、口  
縁部が立ち上がる。甕D  
の影響か。

155は鉢Ac。口縁部に  
は金属器を用いたような  
鋭い刻みが施されてい  
る。156は研磨されている  
ので精製高杯の脚台と考  
える。157は粗製の高杯。

口縁部



体部  
上半



体部  
下半



底部

158

第54図 SB56出土土器 (1)